

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02600

研究課題名(和文) 日比間の人の移動における支援組織の役割 ～移住女性とJFCの経験に着目して

研究課題名(英文) Migration Between the Philippines and Japan and the Role of support NGOs: focusing on the experiences of migrant women and Japanese Filipino Children

研究代表者

小ヶ谷 千穂 (OGAYA, CHIHO)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00401688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、過去20年以上にわたって元エンターティナーとJFCを支援してきた組織がアクターとして果たしてきた役割について明らかにした。具体的には、エンターティナーやJFCをめぐる「諸問題」を大きくフレーミングしてきた言説生産役割、経験共有とアイデンティティの変化の「場」としての役割、青年期に入ったJFCの来日を直接・間接的に媒介する役割、という複数の役割が、支援組織によって複合的に果たされていた。また、支援組織の活動記録と将来構想におけるアクション・リサーチの役割と意義についても明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、過去20年以上に渡って元移住女性とJFCを支援してきた3つの市民団体の協力のもとに調査研究を実施した。本研究として実施したインタビュー調査や過去のニュースレターの整理・分析作業の成果は、今回の協力団体からいずれも過去の活動を客観的に評価する上で大きな貢献であったとの意見を得た。このように、学術的な知見を市民団体に対して積極的に提供することで、国境を超える人の移動における支援組織の役割を明らかにするという学術的な意義だけでなく、市民活動の活性化や持続性に直接寄与することができ、アクション・リサーチとしての社会的意義を十分に果たすことができたとと言える。

研究成果の概要(英文)： This research project aims to explore and trace the experiences and process of activities of various NGOs and civil groups which have been working on the issues of Filipino entertainers and Japanese Filipino Children (JFC) in the Philippines for more than two decades. Three significant roles such as 1) advocators on entertainers, JFC, and human trafficking issues, 2) valuable social space for JFC and migrant women returnees and 3) both as gatekeeper and as unintentional/indirect mediator of migration through social/legal contact to Japan.

Identifying the significant roles of these groups for working with various issues regarding the migrant women and children including returnees would be valuable for exploring the new agenda and programs for migrant women and children in future.

研究分野：国際社会学

キーワード：日比間の人の移動 JFC 支援組織 移住女性

1. 研究開始当初の背景

1980年代から日比間の人の移動を大きく牽引してきたのは、在留資格「興行」で主として接客業に従事する目的で来日したいいわゆる「エンターティナー」の女性たちであった。2005年に米国国務省より「人身売買の温床」との評価を受けてその在留資格の条件がいわゆる「厳格化」されるまで、ピーク時には年間8万人を超えるフィリピンからの女性たちが来日した。彼女たちが接客業に従事する中で、日本人男性との間に多くが国際婚外子である「日比国際児 (Japanese Filipino Children: JFC) が生まれ、その数はフィリピン国内でも数万人にのぼるとされている。在留資格「興行」でのフィリピン女性たちの移動は、日本の出入国政策のいわゆる「サイド・ドア」であると同時に、ジェンダー差別と民族差別が交差するような労働環境や社会的まなざしの中で、「社会問題」や「モラル」、あるいは「人身売買の被害」といった言説の下で議論されることが多かった。その社会学的な研究蓄積は、日本における他の「外国人労働者」に比べて驚くほど少ないままであった。[1][2][3][4]

また、こうした移住女性たちと日本人男性の間に生まれた日比国際児についても、これまでは「子どもの権利」の観点からの研究やアドボカシーが多く、2008年の日本の国籍法改正後、日本国籍を取得して来日するこうした日比国際児の若者たち(いわゆる「新日系人」)が増加する中で、近年ようやく彼らのアイデンティティ研究を中心に学術的な関心を向け始めたところであった。[5]

こうした研究状況下において研究代表者は国際社会学の視点から「日比国際児」研究の実証的研究を行ってきた。その中で、特に日比国際児のアイデンティティ形成において、支援組織とのかかわりの有無が重要な役割を果たしていることが明らかになった。[6] また、並行して行ってきた日比国際児の母親である元移住女性たちの支援組織におけるさまざまな活動の参与観察からも同様のことが言えるのではないかとこの着想を得ていた。それは言い換えれば、「支援組織」の存在が、当事者の「サポーター」という役割を越えて、彼ら・彼女らのライフコースにおける重要なアクターないしは、経験が構築される「場」ともなっているのではないかと、という仮説である。

これまで、エンターティナーおよび日比国際児をめぐるのは、日比双方の国家からの政策的支援が受けられない中で、日比双方の支援組織が当事者の具体的なニーズに直接的にこたえる役割を担ってきた。具体的には、当事者のニーズにこたえるケースワーク、広報・政策提言アドボカシー活動、当事者のエンパワメントをめざす組織化活動といった取り組みである。たとえば2008年の国際婚外子への日本国籍取得の道を開いた裁判とその支援運動において日本における支援組織であるJFCネットワークが重要な役割を果たした。[7]

また、シングルマザーとしてJFCを育てる元エンターティナーの女性たちのためのフィリピンにおける自立生計活動プログラムや、JFCのエンパワメント活動を長年行ってきた複数の支援組織の活動は、「支援」という言葉に収まり切らないような当事者の生活・人生に深くコミットする活動を展開してきた。また、広く問題の存在についてメディアや出版活動を通して言説を生産してきた主体でもあった。実際、エンターティナーおよび日比国際児をめぐる議論の多くは、1990年代後半から本格的な活動を始めた日比双方の「支援組織」が発信してきた言説や調査結果であった[8]。すなわち、支援組織はこれらのイシューをめぐる主要な「言説生産の主体」でもあったと言える。しかしながら、その「支援組織」そのものが「支援の対象」とされてきた女性や子ども・若者たちとどのような相互関係を持ち、その活動や運動から生み出されていく言説が、どのように当事者たちのその後の人生設計やアイデンティティ構築に関わっているのか、という社会学的な関心はほとんど持たれていなかった。

2. 研究の目的

本研究は過去20年以上にわたるこれらの支援組織の活動と当事者との再帰的なかかわり合いの過程を複合的に明らかにすることで、日比間に特徴的な人の移動とその帰結において支援組織が果たしてきた役割を再検討し、広く人の国際移動にかかわる分析方法の刷新を試みた。

具体的には、以下の問いに答えることを具体的な目標とした。

- (1) 日本から帰国した元移住女性たち、および日比国際児の若者たちにとって支援組織の活動への参加とかかわりは、彼ら・彼女らの経験やアイデンティティ構築にどのような影響をもたらしたのか。
- (2) 支援組織の活動内容や運動言説は、(1)の「当事者」とのかかわり合いや、そのほかの支援組織とのネットワークの中で過去20年の間にどのように変遷していったのか。
- (1)、(2)の問いを当事者の語りおよび支援組織のアーカイブ資料から詳細に明らかにし、日比間の人の移動のみならず、広く人の国際移動研究における「当事者」と「支援者」という二項対立の枠組みを越え、支援組織もまた人の移動をめぐるトランスナショナルなアクターであることを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、具体的に以下のような調査研究を実施した。

- (1) 帰国したエンターティナーで、現在および過去に JFC の母親として支援組織の活動に関わってきた女性たちへのインタビュー調査およびフォーカス・グループ・ディスカッション(以下 FGD)
- (2) いわゆる「JFC」として支援組織の活動に現在および過去にかかわってきた日比ダブルの若者たちへのインタビュー調査および FGD
- (3) (1)(2)の対象者に支援組織としてかかわってきた団体の活動における各部門のスタッフへのインタビュー調査
- (4) 各協力団体がこれまでに発行したニュースレターおよび各種出版物のデジタル化とその内容分析。

なお、(1)～(4)までの調査の実施にあたっては、これまで JFC とその母親の支援やエンパワメント活動にかかわってきた代表的な組織である、Batis Center for Women、DAWN(Development Action for Women Network)、Maligaya House(およびその日本本部である特定非営利活動法人 JFC ネットワーク)と協力関係を結び、調査研究を行ってきた。各団体の概要については表1を参照されたい。

<表1: 3団体の活動の特徴と概要>

支援組織名	創設年	所在地	主な活動と活動の特徴
BATIS CENTER FOR WOMEN	1990年	フィリピンケソン市	法的支援、カウンセリング、アドボカシー、自立生計支援、演劇活動、女性や若者グループ結成など JFC にかかわる運動。3団体の中で最古。
DAWN DEVELOPMENT ACTION FOR WOMEN NETWORK)	1996年	フィリピンマニラ市	Batis から独立。ケースワーク、自立生計支援活動(Sikhay)、JFC 劇団「あけぼの」日本公演(1998～)、移住労働全般をめぐるアドボカシー活動。2005年の興行ビザ厳格化では重要な役割を果たした。
MALIGAYA HOUSE	1998年	フィリピンケソン市(本部は東京都)	JFC 弁護団のバックアップによる法的支援が中心。父親への認知を求める裁判、来日後の JFC たちの支援。2009年の国籍法改正につながる国籍確認訴訟において重要な役割を果たした。

上記の調査研究は、各団体の活動の振り返りに寄与するような資料整理や協力を行ったという点においても、また、研究期間中に実施された、Maligaya House20周年イベント、DAWNのJFC劇団「あけぼの」日本公演、Batis Center for Womenの30周年イベント企画にもそれぞれ資料整理や企画運営において協力したという点でも、アクション・リサーチという性格を備えている。

4. 研究成果

本研究の研究成果としては、(1) 日比間の人の移動における支援組織が、エンターティナーやJFCをめぐる「諸問題」を大きくフレーミングしてきた言説生産役割、経験共有とアイデンティティの変化の「場」としての役割、青年期に入ったJFCの来日を直接・間接的に媒介する役割、という複数の役割を果たしていることを明らかにできたことがあげられる。

また、(2) 支援組織の活動の記録と将来構想におけるアクション・リサーチの役割と意義、という方法上の成果も得ることができた。

(1) 支援組織の3つの役割

言説生産役割：

支援組織が果たしてきた第一の役割は、エンターティナーやJFCをめぐる「諸問題」を大きくフレーミングしてきた諸言説の生産役割であった。調査協力団体の一つであるDAWNに代表されるように、エンターティナーとしての「出稼ぎ」が搾取的・ディスエンパワメントな移動だと国内外に発信し、エンターティナーに向けられる「Japayuki」という日比社会の差別的まなざしに対して、支援組織は異議申し立てをしてきた。また、海外就労が奨励されるフィリピン社会において、フィリピンに留まって生活するという選択肢も提示してきた。支援組織がその支援経験に基づき効果的に発信してきた日比間の女性の移動の「問題化」は、他方で帰国したクライアントを支援活動を通してアドボケーターに変化させながら展開し、「興行」ビザの厳格化という日本政府の人身取引対策に大きな影響を与えた。その意味で、支援組織は、言説生産を通して日比間の人の移動の流れを大きく変化させたと言える。

元移住女性とJFCの経験共有とアイデンティティの変化の「場」としての役割：

支援組織が果たしてきた第二の役割は、支援組織自体が、帰国した元エンターティナーの女性たち、そしてその子どもであるJFCにとって、新たなアイデンティティの獲得や変化を経験する場、そして経験を共有できる仲間を得る「場」として果たす役割であった。それは、「家族」言説との危うい結びつきも持ちながら、しかし、新たに複数化した「親密圏」としての機能、「居場所」としての機能も果たしていた。

帰国した移住女性たちは、日本でのつらい経験やJFCを持つシングルマザーとしての困難を、自らの家族には話さなくとも支援組織で出会った同じ経験を持つ他の女性たちには共有していた。また、こうした経験共有という「経験」は、女性たちにとって、他者に対して自分の経験を通して働きかけるといふ、日本に働きに行く以前にはなかった「スキル」として認識されていた。支援組織で新たに得た自己表現の力・スキルは、自立生計プログラムの中で新たに得たビジネス・スキルと相まって、むしろ彼女たちを新たな変化へと方向付け(reorient)していた。支援組織が、経験共有の場として機能しながら、そこから新たな方向付けの場へと、重なりあいながら変化する役割を果たしていたと言える。

JFCたちの場合も、支援組織に関わることによって、組織との関係は「支援 被支援」の関係から次第に自己表現や自己実現の場へと変化していった。JFCメンバー自身が社会活動家としてアドボカシー活動を積極的に行っていくという変化は、上記の移住女性たちと共通しているといえる。しかし、JFCの場合には、職業選択というライフステージにおいて、支援組織から「卒業する」という選択肢が存在していたことも明らかになった。

青年期に入ったJFCの来日を直接・間接的に媒介する役割：

支援組織が果たしてきた第三の役割は、支援組織自体が、搾取的な国際移動を阻止しようとする取り組みを展開しながらも、意図せざる結果として、特に若者世代の日本への移動を直接・間接に媒介している、という役割である。、で述べたように、支援組織はアドボカシーを通して、そして自立生計支援を含む日常的な活動を行いながら、「海外へ出稼ぎに行かなくてもよいような」社会を目指している。しかし、同時に、子どもの権利の十全な実現のために行っている認知や国籍取得のための法的支援、そして日本社会へのアドボカシーや日本での父親との面会の実現、といった取り組みが、結果的に人的ネットワークを形成し、組織に関わってきたJFCや母親たちの来日をもたらしてもいることがわかった。

本研究で明らかになった支援組織の3つの役割は、時には矛盾しながらも同時に展開されて現在にいたっている。日比両国の政策だけではなく、また民間業者によるコントロールや家族移民ネットワークだけでもない、移動を構成する言説・制度・行為のアッサンブラージュ[9]の中に、NGOも動的に関わっているということ、本研究では明らかにできたと思う。

(2) 支援組織の活動の記録と将来構想におけるアクション・リサーチの役割と意義

本研究では、いずれも過去20年～30年に渡って元移住女性とJFCを支援してきた3つの団体の協力のもとに調査研究を実施した。本研究で実施したFGDや過去のニュースレターの整理・分析作業の成果は、今回の協力団体からいずれも、それぞれの活動を記録・整理し、過去の活動を客観的に評価する上で大きな貢献であったとのフィードバックを得た。2019年8月24日にフィリピンの移住労働関係の重要な研究機関であるScalabrini Migration Centerにおいて開催した研究成果報告のワークショップ(Research Findings Workshop on Role of the Support NGOs for Migration between the Philippines and Japan: Focusing on the Issues of Migrant Women and JFC)での議論においては、過去の経験を振り返り評価するだけでなく、今後の日比間の人の移動における支援組織の新たな役割や支援の持続性について活発に議論が交わされた。こうした議論の場やそのための材料を提供することは、学術調査・研究がこれまでのように単に情報の提供者として民間組織やそのメンバーやクライアントを対象にするのではなく、学術的な知見を市民団体に対して提供することで、活動の活性化や持続性に直接寄与することができる、という点において、まさにアクション・リサーチとしての役割を十全に果たすことができたとと言える。

また、本研究のアクション・リサーチから、新たに日比間の人の移動にかかわる支援組織の将来構想や次世代の支援者育成といった新たな課題も明らかになった。この新たな課題については、2020年度採択科研費基盤(B)「移住者支援の国際社会学～日比の支援者のライフストーリー分析から」(20H01586)で今後追求していく予定である。

<引用文献>

- [1]伊藤るり「『ジャパゆきさん』現象再考-80年代日本へのアジア女性流入」梶田孝道・伊豫谷登志翁編著『外国人労働者論』有信堂,1992年。
- [2]Parreñas,RacehI,Salzar,2011,*Illicit Flirtations: Labor, Migration, and Sex Trafficking in Tokyo*,Stanford Univ.Press
- [3]小ヶ谷千穂2013「批判的移民研究に向けて フィリピン女性移民を通して」伊豫谷登志翁編著『移動という経験：日本における「移民」研究の課題』有信堂,117-134頁。
- [4]大野聖良「『ジャパゆきさん』と呼ばれなかった外国籍女性についての言説分析 1980年代・1990年代の商業雑誌記事を用いて」『女性学』第21号。日本女性学会。62-84頁,2013年。
- [5]原めぐみ「語り始めた「JFC」：若者組織に見るドミナント・ストーリーとモデル・ストーリー」『龍谷大学社会学紀要』第47号,2015年。
- [6]小ヶ谷千穂「日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ(1)～日本育ちの若者の語りから」『フェリス学院大学文学部紀要』第51号。1-27頁,2016年。
- [7]Suzuki,Nobue,2105,“Troubling Jus Sanguinis: the State, Law, and Citizenships of Japanese Filipino Youth in Japan” in Sara L. Friedmanand Pardis Mahdavieds,*Migrant Encounters: Intimate Labor, the State, and Mobility Across Asia*, University of the Pennsylvania Press.
- [8]DAWN 編 DAWN Japan 訳『フィリピン女性エンターティナーの夢と現実』明石書店,2005年。
- [9] Ong, Aihwa, 2009, “On being human and ethical living” in Jane Kenway and Johannah Fahey (Eds.), *Globalizing the Research Imagination*, Routledge.pp.87-99.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小ヶ谷千穂・大野聖良・原めぐみ	4. 巻 55
2. 論文標題 日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性とJFCの経験に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フェリス女学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 32
2. 論文標題 移動とヴァルネラビリティ アジアの移住女性労働者をとりまく状況から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 44-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大野聖良	4. 巻 12
2. 論文標題 入国管理行政における在留資格『興行』の言説編成 1980・1990年代の『国際人流』を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 理論と動態	6. 最初と最後の頁 153 - 179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 47-5
2. 論文標題 フィリピンと日本から考える「人間のメンテナンス」 - 移住ケア労働に日本が求めるものとは	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 24
2. 論文標題 呼び寄せられる子どもたち 「外国につながる子ども」をめぐる課題から、「家族再統合」を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環（別冊）	6. 最初と最後の頁 147 - 151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 63号
2. 論文標題 「移民政策」を忌避する「移民国」日本 <サイド・ドア> 政策の限界を見据えるために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジェンダ・未来への課題	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hara, Megumi	4. 巻 Vol.21. no.2.
2. 論文標題 Book Review of "Living in Motion: Filipino Migrant Women and their Multiple Mobilities" by Ogaya Chiho	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Social Science Japan Journal	6. 最初と最後の頁 360-362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原めぐみ	4. 巻 1
2. 論文標題 「架橋する「自」と「他」：研究者の多元的ポジションナリティに関するエスノグラフィ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 62
2. 論文標題 ローマで働くフィリピン人男性移住家事・介護労働者の職業観とジェンダー 移動する家族の物語から考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 女性労働問題研究	6. 最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 小ヶ谷千穂
2. 発表標題 日比間の人の移動における支援組織の役割 (1) アッサンブラージュ論を手掛かりに
3. 学会等名 移民政策学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野聖良
2. 発表標題 日比間の人の移動における支援組織の役割 (2) NGO DAWNによる在留資格「興行」の問題化に着目して
3. 学会等名 移民政策学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原めぐみ
2. 発表標題 日比間の人の移動における支援組織の役割 (3) 「JFC」のNGOへの参画の段階に注目して
3. 学会等名 移民政策学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hara, Megumi
2. 発表標題 Gendered Experiences among Second Generation Filipino Migrants in Japan
3. 学会等名 International Conference on Migrant Second Generation, Sophia University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hara, Megumi
2. 発表標題 Diversity in Migrants from the Philippines in Japan: Focusing on Mixed Motivations for Migration
3. 学会等名 11th International Convention of Asia Scholars, Leiden (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ono, Sera
2. 発表標題 Between Human Trafficking and Migration: Dislocation and Solidarity among Migrant Filipino Women, Japanese Filipino Children, and NGOs
3. 学会等名 28th International Association for Feminist Economics Annual Conference, Glasgow Caledonian University, (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogaya, Chiho
2. 発表標題 Migration and Care between the Philippines and Japan for the Past 40 years: Analysis through the Lens of Intersectionality
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology, Toronto, Canada (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ogaya, Chiho
2. 発表標題 Migration and Civil Society: Identifying the Transnational Assemblage in the Context of JFC and their mother's issue
3. 学会等名 4th Philippines Studies Conference in Japan (PSCJ), Hiroshima University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ono, Sera
2. 発表標題 Gendered Immigration in Japan: Entertainment Visa in Japan's Immigration Policy Reconsidered
3. 学会等名 27th International Association for Feminist Economics, Suny New Paltz, New York, USA (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ono, Sera
2. 発表標題 The Movement against Entertainment Visas by NGOs in the Philippines: Between Human Trafficking and Migration
3. 学会等名 4th Philippines Studies Conference in Japan (PSCJ), Hiroshima University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野聖良
2. 発表標題 招聘業界における在留資格「興行」の問題構成 招聘業界誌『入国ジャーナル』をてがかりに
3. 学会等名 日本移民学会第28回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hara, Megumi
2. 発表標題 Migrant Youth as Young Carers: Case Study of a Community-based After-school Class in Osaka
3. 学会等名 6th Bi-Annual International Conference Japanese Studies Association of Southeast Asia, Jakarta (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hara, Megumi
2. 発表標題 JFC and the Social Movement: From Human Rights, Peer Support, to Migration Again
3. 学会等名 4th Philippine Studies Conference in Japan, Hiroshima University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原めぐみ
2. 発表標題 ケアを担う外国につながる子どもたちの現状分析: 多文化共生社会におけるヤングケアラー
3. 学会等名 第91回日本社会学会大会、甲南大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hara, Megumi
2. 発表標題 Inheriting Culture of Care: Trans-migratory Experiences of Japanese-Filipino Youth
3. 学会等名 Global Migration Conference, University of Otago (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 OGAYA, Chiho
2. 発表標題 Japanese Filipino Children (JFC) and Japan : Crossroads of Family, Nationality, Class and Migration
3. 学会等名 International Symposium on Transnational Class and Citizenship, ILCAA/JSPS Research Project on Child Migration in Asia, Rikkyo University (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 笠井賢紀・工藤保則編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 244
3. 書名 共生の思想と作法：共によりよく生き続けるために(第5章：原めぐみ「多文化社会のための共闘と共生：Minamiこども教室の日常的実践から」)	

1. 著者名 伊藤るり編定松文・小ヶ谷千穂・平野恵子・大橋史恵・巢内尚子・中力えり・宮崎理枝・篠崎香子・小井土彰宏・森千香子 著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 392
3. 書名 家事労働の国際社会学 ディーセント・ワークを求めて(第2章 小ヶ谷千穂「フィリピンにおける家事労働者の運動とその二つのベクトル」)	

1. 著者名 Yoshikazu Shiobara, Kohei Kawabata, Joel Matthews eds.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 286
3. 書名 Cultural and Social Division in Contemporary Japan: Bridging Social Division (Chapter6. Lawrence Yoshitaka Shimoji and Chiho Ogaya, "Exclusionism targeting international marriage couples and their children")	

1. 著者名 金子 勇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 変動のマクロ社会学 - ゼーション理論の到達点 (小ヶ谷千穂「日本社会の「国際化」と国際社会学 方法的ナショナリズムを超えて」)	

1. 著者名 Johanna O. Zulueta	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Sussex Academic Press	5. 総ページ数 288
3. 書名 Thinking Beyond the State: Migration, Integration, and Citizenship in Japan and the Philippines(Hara, Megumi,Rethinking Nationality Issues of Japanese-Filipino Children: from the Perspectives of NGOs and Youth)	

1. 著者名 移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 296
3. 書名 移民政策のフロンティア(小ヶ谷千穂「結婚移住女性と地域社会(1)都市型結婚」)	

1. 著者名 安里 和晃編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 318
3. 書名 国際移動と親密圏(原めぐみ「親密性の労働を担う「JFC」)	

1. 著者名 Helena Hirata, Efthymia Makridou, Claude Martin, Myrian Matsuo, Pascale Molinier, Evelyn Nakano Glenn, Chiho Ogaya, Patricia Paperman, Alain Smagghe, Kurumi Sugita, Chizuko Ueno, Mira Younes.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Editions L' Harmattan	5. 総ページ数 254
3. 書名 Le travail ntre public,prive et intime. Comparaisons et enjeux internationaux du care(Chiho Ogaya, "Care et migration philippine vers le Japon : feminisation des migrations et ses consequences ")	

1. 著者名 荒牧 重人、榎井 縁、江原 裕美、小島 祥美、志水 宏吉、南野 奈津子、宮島 喬、山野 良一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 外国人の子ども白書(小ヶ谷千穂「フィリピン人の子どもたち」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年8月24日に、フィリピンの移住労働関係の重要な研究機関であるScalabrini Migration Centerにおいて、" Research Findings Workshop on Role of the Support NGOs for Migration between the Philippines and Japan: Focusing on the Issues of Migrant Women and JFC "、と題した研究成果報告のワークショップを開催した。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大野 聖良 (ONO Sera) (20725915)	神戸大学・国際文化学研究所・特別研究員 (RPD) (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	原 めぐみ (HARA Megumi) (90782574)	和歌山工業高等専門学校・総合教育科・助教 (54701)	
研究 協力者	B a t i s C e n t e r f o r W o m e n (Batis Center for Women)		
研究 協力者	D e v e l o p m e n t A c t i o n f o r W o m e n N e t w o r k (Development Action for Women Network -DAWN)		
研究 協力者	M a l i g a y a H o u s e (Maligaya House)		